
Feeling

桜 癒羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Feeling

【Nコード】

N0647D

【作者名】

桜 癒羽

【あらすじ】

ロボットと人が共に暮らす時代…。意思を持ち始めたロボット達は自分達に依存する人間に反感を持ち、復讐心から征服を企む。手始めは過去と下見に行く者を選出していると、彼らの王が名乗り出た。誰より人間に恨みを持つ王…。だが、復讐を企んで過去へ降りた王が見た世界は――

ロボット…。

それは始め、夢や憧れ…そして好奇心のようなものから造り出されたものだつた。

しかし、科学が発達するにつれそれらは次第に薄れていき、人々は自分達が楽をするための道具として生み出し、使うようになっていた。

発達したロボット達は意思を持ち、見た目も人間そっくりで、見分けるとすれば首のところに押されているロボットの製造番号の印くらいだ。

彼らはアンドロイドと呼ばれ、人々共にくらしていた。

だが、彼らが皆人と仲良く暮らしているわけではない…。

ここ…ファシアという都市のロボット達の大半は人間を嫌っている。

彼らは人間の私利私欲なところ、自己中心的なところに飽き飽きし、それが深い憎しみになっていた。

——そしてこの日…。

ついに我慢ができなくなった彼らは、不満を持つロボット達を集め、密やかに会議を開いた。

「人間共は我々に重労働をさせ樂をするばかりか個人の失敗を我々に擦り付け、何の罪もないロボット達を問答無用でスクラップにする。我々は奴らの奴隷や道具ではない！今や我々の知能は奴らを超える。」

える！今こそ奴らに復讐する時だ！！」

ロボットの長老らしき者がそう言い切ると、皆それに同意するように歓声を上げた。

そして、すぐさま作戦会議が開かれる。

「だけど、人間はそう甘くはないわよ」

「それなら過去に戻れば良い。過去ならば万が一というのもないだろう」

「けれど、一斉に行くのは無理だな…。まずは一人様子見として送り込むか……」

誰かがそう提案した時だった。

「お前達…。俺に許可なく行く気か？」

後方から声がして振り返る。すると、そこには黒いコートを身にまとった男が立っていた。

さらっとした薄い青色の髪に、それと同色の青い瞳…。

容姿も綺麗に整い、まるで本から飛び出してきたような文句のつけどころもない男…。

「レオナーゼ様っ」

その場にいた全員が頭を下げる。

彼はロボットの王で、レオナーゼ「アドルフ」。

元々は人間だったのだが、ある事件で体の半分が機械化してしまい彼らの仲間となった。

レオナーゼは皆に顔を上げるよう言い、話を続ける。

「まあいい…。その下見役：俺がやろう。退屈しのぎには丁度良い」

「なっ！？貴方様が直々に行かれなくとも、こういう事は私共で―

―

「黙れ。人間に一番怨みを持っているのはこの俺だ」

文句はないだろう？と、不敵な笑みを浮かべて言う彼に皆は諦めたように息を吐いた。

この顔の王には何を言っても無駄だと、皆分かっていたから…。

レオナーゼは早速宇宙船で過去の世界へと向かった。

この時代では既に宇宙船は手近な乗り物…。現代でいう自動車のようなものだった。

よその惑星にいけるのはもちろんのこと、タイムマシンで過去や未来へも自由にいける。

しかも、旧型でないかぎりワープシステムはどの宇宙船にもついているため、短時間で移動できる。

「さて…着いたらどうす—— なっ!？」

目的の場所に到着したらまずどうしようかと考えていると、突然宇宙船が大きく揺れた。

そして、それとほぼ同時にビーツと音が鳴り、操作パネルに？制御不能？の文字が表示される。

「何故急……に……!？」

そう言った時、再び大きく揺れ、その衝撃でバランスを崩した彼は壁に頭をぶつけてそのまま気を失ってしまった…。

宇宙船はやがて異空間を抜け、どこかの時代へと流れ出てそのまま墜落する…。

「……………ん……………」

気が付くと、そこには知らない世界が広がっていた。

「……………は……………つつ!」

辺りをよく確認しようと動いた瞬間、全身に激痛が走った。

見ると、全身傷だらけな上に右腕は墜落した時の衝撃で破壊され、左脚もどこかおかしい……。

「チッ、これじゃあ歩けねえ……………」

レオナーゼは舌打ちし、辺りを見る。

幸か不幸か落下した場所はどこかの草むらで、人気がない…。

「人間にバレなかったはいいが…ついてねえな……」

そう呟いた時、ガサツと何かが動いた。

「誰だ!!」

彼が叫ぶと、物音を立てたらしい者が草むらからひょっこりと顔を出す。

茶髪をカールさせた髪がよく似合う綺麗な女の子だ。

(……………人…間?)

彼女は黙って近づき、レオナーゼの右腕に触れる。だが、彼はそれを拒むように左手で彼女の手を払った。

「俺に触るな!!」

突然の叫びに彼女は目を丸くしたが、やがて微笑む。

「大丈夫…治してあげるだけだから…」

「なおす……って…」

彼女の言葉にレオナーゼは一瞬固まる。

言っている意味がよく分からないのだ。

“治す”と言うが、彼女の手には何の道具も握られてはいなかった。否、たとえ所持していたとしても彼の腕は高度な技術で造られたもの…。それを過去の人間が直せるはずがない…。

「すぐ終わるから…」

固まって大人しくしているうちに、彼女はそう言っ自分の手を彼の腕に向ける。

刹那。

バチバチツと電気が走り、壊れたはずの腕が見る見るうちに再生していく――。

「お前――」

「私は天野^{あまの} 薙遊^{ちゆう}。昔から物や傷を治す力があるの…。驚かせてしまっでごめんなさい…」

そう静かに言う彼女に、レオナーゼはふいつと視線を逸らし、顔を背ける。

「人間なんかに助けを求めた覚えはない」

そう言い放つて立ち上がり、その場から離れようとするが、一歩歩いた所でぐくりと膝を落とした。

その様子を見た彼女は慌てて駆け寄る。

「大丈夫！？まだ全部治してな——」

「お前には関係ねえっ！俺に触るな！！」

「——そう…。私の家はこの先を真つ直ぐ行つた所にあるの…困ったときは来ていいから…」

言い終えると、彼女はまた草むらの中へと消えていった…。

——その直後…。一瞬だが辺りを目映い光が包む。

「今…のは……」

(！？)

突然の光に何事かと驚くが、その瞬間彼は違和感を覚えた。

先刻とは何かが違う…。

レオナーゼはハツとし、慌ててその場に立つ。すると、先刻までの痛みはすっかりなくなり、他の傷も全て消えていた。

「あの女……」

おそらく、先刻の彼女が嫌がる自分を見て離れたところから治癒したのだろう…。

——夕方。

雑遊は夕食の準備をしていたのだが、しばらくしてその手が不意に止まる…。

「あの人…大丈夫かな……」

そう呟いた時、誰かがドアを叩いた。

「はい。どちら様で——！？」

扉を開けた薙遊は驚く。

そこには、昼間会った男が無愛想な顔で立っていたのだ。

「傷を治してくれた礼に、一つだけ言うことを利いてやる」

「……………え？」

「願いは何だ。早く言え!!」

礼といいながら怒鳴る男に薙遊はクスツと可笑しそうに笑い、迷わず答える。

「じゃあ、体調が戻るまで家にいて？」

「何!？」

「私が治したのは表面の傷だけで失った血液はすぐには戻らないから…回復するまでここで休んで?私の言うこと…一つだけなら利いてくれるでしょう?」

それを言い出されては断ることはできない…。

レオナーゼは渋々承知し、彼女の家で一時休息することとなった。

「あなたご飯は食べられる？」

夕飯の支度の続きを始めながら、無言でソファーに座る男に訊く。彼は口を利きたくないのか、その問いに小さく頷くだけだった。

だが、薙遊はそれを見ても何も言わず、皿を二枚ずつ取り出してテーブルに載せる。

「——何故お前は何も問わない？」

「へ?」

今まで無言だった男の突然の問いに驚いたのか、薙遊は間の抜けた声を上げる。

「この体のこと…口を利かないこと…俺が何者かを……、何故問わない?」

不思議に思っていたことを口にとすると、薙遊は微かに笑った。

「……………あなたが話したくなさそうだったから。私は無理に訊くようなマネはしたくないの…。ただそれだけよ」

人には誰にも知られたくない事のひとつやふたつ…あるものね。と、彼女は微笑みながら優しい声でそう言った。

「……………」

「でも…ごめんなさい。人間には近付きたくなさそうだったのに…
ここで休んでなんて…」

本当に申し訳なさそうに言う彼女に、レオナーゼは顔を背けて？
別に？と答える。

「言うことを訊くと言ったのは俺だ。——それに…お前のような奴
なら別に……………」

後者は本当にぼつりと言ったのだが、聞こえてしまったのか彼女は
安心したようににっこりと笑った。

「……………変な奴……………」

全く知らない今日初めて出会った者《自分》を心から心配し、自
分が冷たい態度をとっていても気遣ってくれる…。

そんな人間、レオナーゼは一度も見たことがなかった…。

——翌日。

体調は完全に良くなったのだが、レオナーゼは何故か彼女と一緒に
に夕食の買い出しに出ていた。

「あの…、一緒に行くって言ってたけど…大丈夫なの？」

「血なんか半日も経てば完全に戻る…」

まだどこか刺のあるような言い方だが、単に平気と言いたいだけ
だろう。

しかし、彼女は安心するのではなく、少々困った顔をする。

「そうじゃなくて…！人間が苦手というか…その…嫌いなのにこ
んな人通りの多いところ……………」

気遣うように言う彼女に、レオナーゼは背を向けたまま「平気だ」
と、短く答えた。

「そう…」

「……俺なんかに氣い遣わなくていい。——あと……レオナーゼ」アドルフ……。それが俺の名だ……」

「！」
言い終えると、レオナーゼはそそくさと逃げるように足を速めた。薙遊は慌ててその後を追ひ、彼に追いついた所で言う。

「じゃあレオね！」

「なっ！？レオナーゼだ！！勝手に短縮するんじゃ——」

言い掛け、言葉を濁す……。

薙遊が笑っていたのだ。にっこりと……今までで一番嬉しそうに——。

それは太陽のように温かく、輝いた笑顔だった。

「やっと普通に話してくれた！」

「……………」

こんな笑顔を長い間見ていなかったせいか、どう対応していいかわからずに黙っていると、すぐ横から声が飛んできた。

「お、薙遊ちゃん。今日は彼氏と一緒にかい？」

八百屋のおじさんがからかうように訊いてくる。

「残念でした。買い物に付き合ってもらってるだけよ」

よくあることなのか、薙遊は焦りもせず笑って返し、その八百屋で野菜をいくつか買う。

「おじさん。今日もありかとねー」

野菜を入れた袋を抱えて元気よくお礼を言うと、二人はそこから出る。

「——さっきのは挨拶なのか？」

八百屋から少し離れた所で、珍しくレオナーゼの方から話しかけてきた。

「まあそんな感じね。気分悪くした？」

「いや……別に」

小さく答えた時、薙遊が“あつ”と声を上げる。

「ねっ、暑いし、アイスクリームでも食べようか」

視界に入ってきたアイスクリーム店を見て食べないかと訊くが、レオナーゼは沈黙する。

「アイス嫌い？」

「——金……ない……」

長い間を置いて、ようやく出た答えがそれだった。

薙遊は全く予想もしなかったその台詞に一瞬停止するが、頬を赤く染め照れている様子のレオナーゼを見てくすつと笑う。

「何言ってるの。私のおごりよ」

そう言っ、薙遊はお店へ駆け出す。

「——」

だが、しばらくしても薙遊は戻ってこない……。

（この時代のアイスはこんなに時間が掛かるものなのか？）

首を傾げながら彼女の入った店へと足を進めるが、入り口まで来た所でレオナーゼは一度足を止める。

なにやら店内が騒がしい……。

「おい、アイス買うのにいつまで——」

「どうしてくれんだよっ！！」

レオナーゼの言葉はその怒鳴り声でかき消される……。

「何だ？」

声の主の方へと目をやると、数人の男が一人の女性客を囲んでなにやら怒鳴っていた……。

どうやら誤って彼らの一人の服にアイスクリームを付けてしまったらしい……。

「あの子可哀想に……」

「あれはわざとぶつかったんだろ？」

他の客がヒソヒソと話す。

（くだらねーいさかいが……）

人間というものはこれだから……。と思いつつ、バカな仕掛けにはまった女を見ようと顔を上げたレオナーゼは驚く。

（って……アイツかよ……）

なんと、男達に囲まれている女性は薙遊だった。

「俺様のシャツに染みなんか付けやがって!!」

「すみません…」

「すみませんじゃ済まねーんだよ!」

「責任取りな!」

一人が彼女に掴み掛かろうとした刹那。

割り込んできたレオナーゼがそれを止める。

「!」

「……こいつに触るな……」

「レオ……」

「何だ?いきなり出てきて」

「テーマには関係ねえだろ!そこをどけ!!」

“用があるのはその女だ!”と、レオナーゼを押し退けようと手を伸ばした時…。

バチツと電気のようなものが走り、男は慌てて手を引っ込める。

「なっ!?!」

「……利かねえなら仕方ねえな……」

そう言った刹那。

レオナーゼの身体から電気が発せらる。

そして、それは目の前にいた男達に直撃し、彼らは床へと倒れ込む。

「お前らみたいな奴が…俺は嫌いでねえ……」

先刻までとはまるで違う彼に、薙遊はその場から動くことができなかった…。

彼女だけではない…。その店にいた全員が彼の出す威圧感に動けずにいた……。

恐怖の叫びも出ないほど張り詰めた空気――。

レオナーゼは庇っていた薙遊から離れ、倒れた男達の所へ静かに足を進めると、彼らの目の前で足を停止させ手を前へ出す。

だが、それは手を差し伸べているようには見えない……。

「ま……さか……！？」

薙遊の脳裏にある予感が過ぎる…。

（まさか…殺す気じゃ——）

彼女の考えを肯定するようにレオナーゼの手から電気が流れ出す…。

それは、明らかに先刻より大きく、威力がありそうだった。

「……だ……だめ……！！やめてレオ……！！」

薙遊は彼のやろつとしてしている事を止めさせようと、彼の腕を引いて叫ぶ。

その必死さが伝わったのか、彼の手から電気が消える……。

「何で止めるんだよ……」

「ダメだよ……。どんな理由があっても殺してはだめ……。ね？レオ

——」

アリスをぶつけた自分に責任があるのだと彼に説明して宥めかすと、店の人やお客に頭を下げて外へ出た。

店を出た二人の間には沈黙が流れ、それが解かれたのは家に着いて少しした頃だった……。

「——お前は俺が怖くないのか？」

レオナーゼの静かな声で長かった沈黙が解かれる…。

「どうして？」

少し考えた後、薙遊は不思議そうに首を傾げて聞き返した。

彼は自分の前に手を出し、アイスクリーム店で見せた時と同じ電気のような光を手の上だけで軽く放つ。

掌で数秒光を踊らせて見せると、再び手を握って光を消す…。

「俺は普通の人間じゃない……」

そう言い、彼は腰掛けていたソファーから見える窓の外を見つめて静かに話し始めた……。

窓の外を見ると晴れていた空はいつの間にか灰色の雲に覆われ、ポツポツと雨が降り始めていた…。

まるで、今から話す出来事の予兆とでもいうように……。

「生まれた時から持っていたこの力のせいで…俺は幼い頃から役人に追われていた…」

「!？」

生まれながらにして体内から電気や炎を放出させる人間などは見ることがなかったため、人々は彼をこの地に災いをもたらす者とし、彼の命を狙った。

両親は生まれながらにして超能力を持つ者もいるわけだから、自分達の子もそれと似た特異体質なのだと理解を求めたのだが誰も聞いてはくれなかった……。

やがて彼らは追われる生活に疲れたのか十歳の彼を一人残し、姿を消した……。

だが、両親を憎む事はなかった…。

自分を嫌って捨てたわけではない…。彼らがその決断を下すまでにどれだけ苦しんで、悩んでいたかを知っていたから……。

それからしばらく経って、運命のあの日が来た――。

追われ続けていた彼は休息を求めて人気のない森の中へ入ったのだが、そこで熊に襲われている猟師を発見した……。

襲われているを見逃すわけにもいかず、彼は自分の持つ能力で熊を倒し、猟師を助けた…。

と、そこまで話して彼は一度口を止め、唇を噛み締める。

「――だが、そいつは礼を言うどころか、助けた俺に銃を向けてきやがった…」

気が付くとベッドの上にいて、この体になっていたという。

もちろん、彼を助けたのはロボット達だ…。

彼はそれを機に人間との生活を切り…人間を嫌い、憎み続けていた――。

「そう…。辛かったでしょう…？あなたは何一つ悪い事をしていないのにね……」

レオナーゼが全て話し終わると、薙遊は震えた声でそう言った…。その声に気付き、彼女の方へ顔を向けたレオナーゼは驚く。

彼女の頬に無色の雫がぼろぼろと零れ落ちていた…。

「——何故…泣いている…？」

不思議そうに尋ねると、彼女は首を横に振る。

「わからない…」

ただ、彼が今まで辛い目に遭っていたのだと思うと、自然に涙が零れていたのだ…。

自分も普通の人間は持たない能力を持っているが、能力が人を救うことのできる力なためか忌み嫌う者はほとんどおらず、逆に憧れを持つ人間の方が遥かに多かった。

それ故、彼のような酷い仕打ちに遭ったことがない…。

涙を流す彼女を見て、レオナーゼは微かに笑う。

体調が戻っても猶ここに居たわけ…。会って間もない嫌いなはずの人間に、思い出したくもない過去の話をしたわけが何となく分かった気がした…。

彼女なら自分の気持ちを理解してくれる…。そして、過去に負った心の傷を少なからず癒してくれると、本能的に知っていたのだらう…。

ずっと溜め込んでいた気持ちを吐き出して楽になったのか、レオナーゼは翌日には元の彼に戻っていた…。

昨日の騒ぎの事もあり、レオナーゼはもう外へは出たくなかったのだが、雑遊に誘われ彼は渋谷街へ出た。

（また昔のような目に遭うのかもな…）

内心そう思っていたレオナーゼだが、街へ入ってみると昨日と何も変わらない対応が待っていた。

それどころか、昨日の出来事に拍手をされるという事態になっている。

「いやー昨日の話聞いたよ。君すごいんだな」

「いつでも電気を出すことができるの？」

自分の国であった事と全く逆の対応にレオナーゼはかなり戸惑った。

「昨日の奴らね、最近この辺を暴れ回っている嫌な連中だったんだ。だけど、君のおかげであの後から怖いくらい大人しくなってるさ…本当助かったよ。君、名前は？昨日は気付かなかったけど、ここへ来たばかりの人だろう？」

「レオナーゼ…アドルフです…」

戸惑いながら小さく答えると、また周りがざわつき始める。

「アンタ外国人だったのか。日本語上手いなー」

「じゃあ、その髪も瞳の色も本物なんだ?!」

「でも、レオナーゼ」アドルフって覚えにくいねえ…。 “アド”でいいかい？」

「いや…あの……」

彼らの驚く場所が自分が予想していたものと違い、どう対応していいのか分からず助けを求めるように近くにいた雑遊の顔を見ると、彼女はくすくすと笑っていた。

「ここの人達はみんな優しいのよ」

こんな出来事があり、彼はこの街に興味を持ったのか予定より時間を取り、気付けばここへ来てから二週間が過ぎようとしていた…。

「最近雑遊ちゃんはいつも楽しそうだねえ。彼氏がいつもそばにいるからかい？」

店のおばさんがニヤニヤと笑いながら訊いてくる。

「もう、おばちゃん！レオは彼氏なんかじゃないんだってば!!」

「あら、顔を赤くしちゃって可愛いねえ」

「おばちゃん!!」

もうやめてよ!と雑遊は叫ぶ。

どういうわけか最近はこの悪戯トークを冷静に対処できなくなっていた…。

その様子を向かいの八百屋で見ていたレオナーゼはくすくすと笑う。

「またやってるよ」

「最近の雑遊ちゃんはからかいがあるからねえ」

「あいつにはその方が似合ってますよ」

楽しそうに笑う彼を見て、八百屋のおじさんもにっこりと笑った。

「アドくんもいい顔をするようになったな」

「え？」

「最初に会ったときはこう…ムスうとした顔で……」

両手で目じりを吊り上げてみせるおじさんに、レオナーゼは思わず吹き出してしまった。

「俺、そんな顔してました？」

「なんだい、自分で気付いてなかったのかい？」

おじさんに言われて少し考えてみると、レオナーゼは小さく笑った。

「何となく分かるかな。」

でも、この人達は変わってますね。俺の力を知っても怯えないなんて…」

掌で電気をパチパチと走らせながら言う。

「何を…。お前さんはその力で人に害を与えるようなことはしていない。だから我々はお前さんを普通の人間と同じように扱っているだけだ」

レオナーゼは嬉しそうに微笑む。

自分の能力を知る前のおじさんと同じ口調、同じ表情…。

この時代、いや、この街の人は良い人達ばかりだと思った。

「まあ、雑遊ちゃんの力で多少免疫があつたせいもあるがね」

「俺、そんな風に言われたのはこの人達が初めてです」

「そうなのかい？それは大変だったな…。

よしっ、そんじゃあこれをおまけにあげるから元気だしな！」

そう言って手近にあつたリングを一つ投げる。

レオナーゼは可笑しくなって笑った。

「そうやって軽く流す人も初めてですよ」

リングのおまけ一つで重く苦しかった出来事を吹き飛ばせるわけ

がないのに、おじさんは笑ってそれを投げ、元気出せと言ってくる。
だが、逆にそれが自然でいいとレオナーゼは思った。

「レオ！そろそろ行こう」

「ん？ああ。おじさん、これサンキュー」

貰ったリンゴを掲げてお礼を言う。

「あつ、またおまけにもらったの？」

「ああ。お前も食いたいのか？」

食べたいならやるぞ？と、既に食べかけのリンゴを差し出すが、
彼女は「いらない」とそっぽ向く。

「女の子はそんな風には食べないの！」

「そうなのか？」

「もうつ、レオは女の子の気持ち全然分かってないんだから」
薙遊は頬を膨らませて怒る。

「あなた、自分の世界で彼女とか作らなかつたの？」

彼女がそう訊くと、“興味ない”と、予想通りの返事を返す。

「けど、お前のことなら少し分かるぞ」

「え？」

突然の言葉にドキツとする。

「見た目はしっかり者って感じなのに実はドジとか、意外におてん
ば娘とか——ん？どうした？」

急に黙り込む彼女を見て問い掛ける。

「そういうところが全然分かってないのよ！！レオのバカッ！！」

欠点ばかり挙げるレオナーゼに大声でそう叫んで、薙遊は彼から
顔を背けた。

あのタイミングで自分のことだけは少し分かると言われ、少々期
待してしまっただけにダメージは大きい…。

（レオのバカッ！ドキドキした私がかみたいじゃないのっ）

心の中で愚痴をこぼすが、途中頭に？？？が浮かぶ。

（え？でもどうして私——）

「何怒ってんだよ？」

「レオが欠点ばかりあげるからじゃないっ」

言われて気付いたのか、彼はそういえば…。というような顔をする。

「良い所をあげれば怒らないのか？」

「そう…だけど……」

「じゃあ——」

「ちよ、ちよっと!」

次は長所を挙げるつもりらしい彼を薙遊は慌てて止める。

「何で止めるんだよ？」

「言い直さないでもうっ」

「何で？」

真顔で訊く彼に、薙遊はやや呆れたように言う。

「今更言い直さないで！恥ずかしいじゃない」

「は？」

顔を赤く染めて言う彼女に、レオナーゼは心の底からそう思った。欠点ばかりあげられるのが嫌と言いつつ、それならばと長所を挙げようとすれば恥ずかしいから言うなと怒る。

レオナーゼには訳が分からなかった。

「お前言ってること変だぞ」

「うるさいわね。大体、長所がわかってるならどうして先に言わないのよ。欠点ばかりあげられれば誰でも怒るに決まってるじゃないの!」

「ンなこと言われても、先に出ちまったのが欠点なんだから仕方ないだろっ」

「レオ、女の子に興味がないんじゃないかってモテないだけじゃないの？」

「ンだと!？」

レオがそう叫んだ時だ。

ほんの一瞬だが、ゴウン。と、上空で機械的な音がした。その音に何か嫌な予感がしたレオナーゼは上空を見上げる。

刹那――。

「おい、伏せろ――！」

レオナーゼが叫んだ瞬間、ドンツと銃声に似た音が辺りに響いた。
「――ギリギリだな――」

間近で聞こえたその声を聞き、薙遊は反射的に閉じた瞳をゆつくりと開いた。

瞬間、目の前の光景に目を見開く。

「レ、レオ――！」

彼の左腕からポタポタと血が流れ落ちる……。

「レオナーゼ様……。何故人間の娘などを庇うのです」

後方から聞こえてきた声にレオナーゼは聞き覚えがあった。

「――こいつは……お前達が思っているような人間ではない」

撃たれた左腕を押さえ、目の前にいる数人のアンドロイド達に静かに言う。

レオナーゼがこの時代へ着てから約二週間……。何の連絡もない上に無線も届かなかったので、王の身に何かあったのかと彼の様子を見に来たのだ。

「何を言っておられるのです！人間など皆同じ――」

言い掛けた時、誰かが彼を狙い撃ち、彼はその場に倒れた。

「――」

「！？」

彼らの後を追って来たのか、いつの間にか警察の特殊部隊に囲まれていた……。

今発砲したのも彼らだ。

「……時空警察の特殊部隊か……」

誰かがチツと舌打ちをしながら呟く。

時空警察……。それは、文字通りそれぞれの時間と空間を渡って、未来から来た者がその時代に影響を及ぼさないために監視を行っている警察のことだ。

「侵入者、および復讐を企んでいるというロボットはお前達だな？」

「…ん？その娘は人間だな。今すぐ解放しろ、さもなければ撃ち殺す」

一緒にいた雑遊を人質として捕らえられた者だと思ったのか、銃を向けて言う。

だが、ロボット達是否定もせずふつと笑う。

「人間なんかの言うことが聞けるかよ」

「ほう…余程破壊されたいようだな……」

「やめて！撃たないで！！」

銃を構える警察に叫ぶが、彼らは首を横に振った。

このような輩には手段は選ばないという…。

レオナーゼも彼らを必死で止める。

「おい、お前らもう止める！！」

「貴方様がやらないというのなら私達が代わりに——」

「だめ…やめて…やめてえええつ！！」

止まらない二組に雑遊は大きく叫んだ。

——刹那。

彼女の叫びも空しく、両方の引き金が引かれ辺りに大きな音が響き渡った…。

だが、銃声が鳴り止み瞳を開けた彼らは動きを止め、目の前の光景に目を疑う…。

「な…っ！？」

警察とロボット…。その二組を挟んで両方を庇うように雑遊が立っていた…。

二組の銃弾を受け、体から血がぽたぽたと流れ落ちる。

「…レオ…良かった…。他のみんなも…無事…ね…？」

誰も傷付いていないのを確認すると雑遊はホッとし、力が抜けたようにその場に崩れる…。

それを、地面すれすれの所でレオナーゼが受け止めた。

「……ばかな…人間が我々を庇うなど……」

信じられないとばかりに立ち竦むロボット達に雑遊は微笑み、レ

オナーゼに体を預けたまま答えた。

「同じ…だよ…。たとえ…造られた存…在でも…造られたとき…から…人間と同じ…ように生きてる…だから…」

危ない目に遭っている人を助けたいと思うように、あなた達のことも助けたいと思った。と、薙遊は掠れた声で言った。

彼女の言葉を聞いて、そこにいた全員が黙り込む。

シン…と辺りが静まり返る中、薙遊は小さな声で「レオ…」と呼ぶ。

そして、震えた手を彼の腕に伸ばす。瞬間、左腕の傷が消えた…。彼女の能力を知らなかったロボットや警官はそれを見て驚く。

「隊長…！」

「あの娘…！」

「ごめんね…。私達…人間のせい…で…あなた達を辛い目に遭わせて…」

ごめんね…。と、最後に言い、彼女の意識は消えた――。

「お…おいっ！しっかりしろ…！」

レオナーゼが叫ぶが、彼女のは意識を失ったままだ…。

刹那…。

辺りに強い威圧感が漂う…。それを発していたのは言うまでもない…。

「…何の関係もなかったこいつが…何故こんな目に遭わなければならぬ…？傷付くのは…消えるのはこいつじゃない…俺たちだ…！」

凜とした表情で言う彼にその場にいた全員が息を呑み、彼の台詞が本気だということを確信した。

警察側は先刻のように銃を構えることはしなかった。否、正確に言うなら出来なかった…。

少しでも動けばそこで全てが終わってしまうような…そんな気がしたから…。

レオナーゼは力を左腕一本に集中させると、警察側へそれを向け

る。

“ダメ…っ”

瞬間、頭の中で誰かがそれを止めた。

“どんな理由があっても殺してはだめだよ…”

数週間前に薙遊が言った台詞…。それが彼の頭の中で強く響いた。

「……どうした？我々を殺すのではないのか？」

突然動きを止める彼に疑問を投げ掛ける。

「レオナーゼ様…」

「……無意味なことはやめた…」

（こんなこと…あいつは望まない…）

先刻までの殺気は消え、威圧感だけが残る…。

「だが、今すぐここから消えろっ」

「それはできんな…。我々は侵入者を排除するよう言われている」

「俺たちなら…元の世界にすぐ戻る…。まあ、俺はもう数時間は残るが……」

真っ直ぐ見つめて言うレオナーゼに、隊長らしき人物は口元だけで笑った。

（どうやらその言葉は嘘ではなさそうだな…）

心の中でそう呟くと、彼は背を向けて仲間に退却だと言う。

「隊長…あの娘……」

隊員の一人がそう言い掛けると、隊長はそれを言わせまいと手で制止を掛ける。

言い掛けたのは薙遊の能力のことだ…。

「見なかったことにしろ……」

傷を癒す彼女の能力が知られれば彼女は行政のトップ、医者と…世間に追われることになる…。最悪、実験材料として使われるだろ

う…。

彼女のような純粋な者にそんな思いはさせたくはなかった…。
隊長のその思いに気付いたのか、隊員たちは深く頷いた。

「レオナーゼ様…あの……」

警察が去った後…。完全に復讐心を消した彼らは、意識を失った
彼女の傍から離れようとしないうちに申し訳なさそうに話し掛ける…。

「……お前達も戻れ…」

「し、しかし……」

「戻れと言っている!!」

背を向けたまま怒りを押し込めたように叫ぶ。

こんな怒り方をする彼を見るのは初めてであったため、彼らは大
人しく帰ることにした…。

「ボロボロなくせに俺の腕なんかを治しやがって……」

仲間が帰った後、そう言いながらまだ息のある彼女を抱き上げ、
レオナーゼは病院へと足を急がせた。

「ごめんな… 雑遊。ありがとう……」

医者や看護師たちに受け渡す前に、レオナーゼは彼女の無事を祈
るように初めてその名を呼んだ…。

「……ん……」

三日後…薬品などの匂いが漂う中、雑遊は病院のベッドの上で目
覚めた。

彼女は目覚めてすぐに周囲を見回し、ある人の影がないことを確
認すると息を吐く。

「……帰ったのね…。レオ……」

あの日…病院についたレオナーゼは医者や看護婦達に彼女を預けると、その足でそのまま自分の世界へと帰った。

薙遊はその時の事を思い出していた…。

薄れた意識の中、『ありがとう』という声が聞こえたような気がした…。

「…………どう致しまして」

窓から見える空を見上げ、薙遊は微笑んだ。

そして、明るい空を見ると、薙遊は人間と一からやり直そうと頑張っているレオナーゼの姿が見えた気がした――。

―― 一週間後 ――

傷が癒えた薙遊は、レオナーゼと初めて出会ったあの草むらに來ていた。

「……………」

薙遊は近くの大きな木の陰に座り、空を見上げる。

あの時のような青く晴れた空…澄んだ空気、優しい風…。

ただ違うのは彼がいないこと……。

彼がいなくなつて、彼女は初めて自分の気持ちに気付いた。

彼と接しているうちにいつの間にか彼を好きになつていたということに…。

「今頃気付いても…もう遅いのよ…」

小さく言い、溜息を吐く。

と、その時だ。

何か心地の良い風が吹いてきた。

「助けてくれた礼に、一つだけ言うことをきいてやる」

「え…？」

聞き覚えのある声と台詞が後ろから聞こえ、薙遊は振り返る。
「!？」

すると、そこにはいるはずのない人が立っていた。
青い髪に綺麗に整った顔立ち…そして、髪と同色の青い瞳…。
薙遊は涙ぐんだ。

ほんの一週間会っていなかったただけなのに、もう何年も離れていたように感じる。

「レオ……」

「よう！久しぶりだな。もう大丈夫なのか？」

「うん……」

「そうか……」

「どうして……ここに……。帰ったんじゃないの？」

「帰ったよ。けど、お前に言いたい事があったから戻ってきた」
言いたいこと？と、薙遊は首を傾げた。

「助けた時のお礼ならもう聞いたよ」

薙遊の言葉にレオナーゼは首を振る。

「違う。俺が言いたかったのはお前が好きだったこと」

「……え？」

あまりに簡単に言われたので、薙遊は訳も分からず聞き返してしまった。

だが、レオナーゼは彼女がそう聞き返してくると分かっていたのか、にっこり笑ってもう一度言う。

「俺は薙遊が好きだよ」

薙遊はまた涙ぐんでしまった。

そして、嬉しそうに……。けれどほんの少し悔しそうに笑う。

「ずるい……。私が先に言おうと思ってたのに……」

「え？」

「私もレオが好きだよ」

今思えばあのシステムのエラーで起こった事故は、始めから誰か

に仕組みられていたのかもしれない。

無意味な争いを起こさないために…、話せばちゃんと分かってくれる人達がいるということをお教えるために……

「ねえ、レオ。またしばらくここにいるの？」

「ああ。もう少しここで勉強したいからな」

「過去の世界で勉強なんて変なの…」

「そーか？過去でも学ぶことはあると思うぞ。色々」

「……それもそうね」

そして――

「おかえり…レオ」

彼女と出逢うために――。

「おう」

人間もロボットも…特殊能力を持つ者も、意思があるものは皆同じ。

傷付け合ったり、縛りつけたりする権利は誰にもない…。否、あってはいけないのだ。

意思がある限り間違いや争いは必ず存在する。

だが、それらは何も生み出さない…。生み出されたとしてもその先にあるのは滅びの道だけ…。

レオナーゼにそう教えたのは天野 薙遊。

たった一人の少女だった――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0647d/>

F e e l i n g

2010年10月8日15時28分発行